

第2章 13世紀

(仮訳)

<i>"The rose rayleth hire rode</i>	バラが彼女の行く道を飾り
<i>The leues on the lyhte wode</i>	明るい木々の葉は
<i>Waxen al with wille</i>	思うままに大きく育ち
<i>The mone mandeth hire bleo</i>	思い出はその色を放ち
<i>The lilie is lossom to seo</i>	ユリは瞳に心地よく
<i>The fenyl and the fille."</i>	フェネルとチャービル

Springtime, MS., c.1300. 春の季節 写本 1300年頃

ノルマン征服[1066年]に続く時期、この国は絶え間なく海外での戦争に突き進むとともに国内では混乱が続いた。当時、庭園を静かに楽しむ考えなどほとんどあり得なかったのは、ウィリアム1世[在位1066~87年]とその息子たちが鉄のムチでイングランド人を支配しているような時であり、あるいは、シュテファンがモード皇后“Empress Maud”に対抗して王位をねらって戦っている時であり、聖地への十字軍に人々が心を奪われている時であり、イングランドの憲法がゆっくりと作り上げられ、血が流され止むことを知らない闘争により自由が徐々に獲得されつつある時であったからである。

この困難な時代にあって、命と財産の安全のためには、できる限り外から近づけないような場所に住むことが必要であった。丘の頂上に城が築かれ、あるいは防衛上適切な高い場所や、急な岩山の崖がない場合には、川や沼の背後に住むことにより安全を確保しようとした。これは修道士が求めた道とは正反対で、彼らは基本的には肥沃な谷間を選び、そこに修道院を建て、果樹園、庭、ブドウ畑で栽培した。封建時代の城の前面の緩やかな斜面には広い庭を造るスペースはなく、その住人たちがそれを越えて冒険することは安全ではなかったので、外側に何か庭なり果樹園を造る意味はなかった。そんなことをすれば単に乱暴な隣人どもによって荒らされるだけであった。しかしながら、このようなどこから見ても不利な状況にもかかわらず、果物の栽培をやってみようとする動きは珍しくはなかった。

カーライルでは町の周り、城壁の外に庭があったことは間違いない。それはヘンリー2世[在位1154~89年]とスコットランドのウィリアム獅子王との間の1173年、1174年の戦争に関して韻を踏んで語られる古い年代記を信じるならばの話であるが。作者と思しきジョルダン・ファントム Jordan Fantosme はカーライル城の戦いを次のように記している。その一節を翻訳するとこのようになる。(*Surtees Society, 1840年, p.77.)

(仮訳)

<i>"They did not lose within, I assure you I do not lie,</i>	彼らは城の内側では負けなかった、それが嘘でないのは保証します、
<i>As much as amounted to a silver denier.</i>	ドウニエ銀貨の価値に匹敵するくらいに。

But they lost their fields, with all their corn しかし彼らは耕地を失った、すべてのコーンもろともに
[And] their gardens [were] ravaged by those bad people, (そして) 彼らの庭園はあの悪人たちにより
荒らされた

And he who could not do any more injury took it into his head そしてこれ以上危害を加えられなく
なった者が思いついたこと、それは

To bark the apple trees ; it was bad vengeance.” † リンゴの木の皮をはぐこと ; それは酷い復讐だった。

†興味深いことに、カーライルの庭園がそれよりも早く、1131年に存在していたことがヘンリー1世の第
31年のパイプ文書に書かれているので確認できる。(printed edited., p141)

国王の土地からの収入 - 「ウィリアム・フィッツ・ボールドウィンはカーライルの国王の庭園の古い農場
に関し 30 シリングの会計簿を提出する。彼は (同じもの) を国庫に送付し、 - そして彼は自由になった。
そして同じウィリアムが今年分の同じ庭園の農場に関し 30 シリング借りた。」

パイプ文書 Pipe rolls、王室会計文書 Exchequer rolls、リベレート文書 Liberate rolls の
全体を通じてあちらこちらに、12世紀、13世紀の王室庭園の様子を示す記述が少しずつ残
されている。1158 - 9年にはロンドンにある王室果樹園の担当者 “Henricus Arborarii” に
対し、またウィンザーその他のブドウ剪定人に対し支払が行われている (‡ Pipe Roll Society.
Vol. I., 1884年)。1259年には、ヘンリー3世 [在位 1216~72年] はウェストミンスター宮殿
の大規模な改修を行い、職人、大工その他への支払いの中に (§ Devon Issue Rolls of the
Exchequer, 1837年) 「ローラーで庭園部分の土地をならす」労働者への支払いも何件か見ら
れる。

エドワード1世 [在位 1272~1307年] の治世下においては、庭園の管理のための費用がい
ろいろ記載されており、ウェストミンスターのブドウ畑のブドウの剪定や、「国王の父であ
るヘンリー国王陛下の以前の使用人であった」 “Roger le Herberur” への日当 2¼ペンスの
支払いも記載されている。1276 - 7年には、国王の森の管理人であるロバート・ドウ・ベバ
リー氏 Master Robert de Beverley に対し、国王は 97 ポンド 17 シリング 7½ペンス支払っ
ているが、「その目的はチャリングに隠れ家を作るとともに、そこに国王のキッチンガーデ
ンを造るために必要な諸々の費用に充てるためであった」。ヘンリー3世の主たる庭園はウ
ッドストック [オックスフォード近郊] にあったが、この庭園は彼が造ったものではなく、ヘ
ンリー2世の時にすでにそこに庭園は存在していた。その中には「美しきロザモンド」 “Fair
Rosamond” の悲劇的な運命として有名になった「女性の私室」 “Bower” を隠すための迷路が
あった。 [この迷路は、ヘンリー2世が愛人であるロザモンドを女王の目から隠すために作ったが、噂を
耳にした女王がそこを突き止め、短剣か毒薬かどちらかをと迫り、ロザモンドは毒薬をあおって死んだと
いうイングランドの有名な言い伝えがある。] ロマンズと謎に満ちた雰囲気がこの隠れ場所にはつ
きまとうが、実際のところは迷路自体は珍しいものではまったくなかった。大昔から迷路が
存在していたことの証拠は存在しており、それらから、より現代に近い時代の迷路の様子を
うかがうことができそうである。最初の迷路は地面に刻まれた曲がりくねった園路であり、

その痕跡は今もイングランドのいくつかの所に確認することができる。これらのうち、サフラン・ウォールデン Saffron Walden のものは渦巻き状の溝がある最も衝撃的な事例である。カムデンは当時ドーセットシャー州に現存していた迷路について書き残しているが、それはトロイ・タウン、またはジュリアンの私室という名前のものであった。(*Camden's Britannia, by Gough, 1806 年. Vol. I., p.73.)

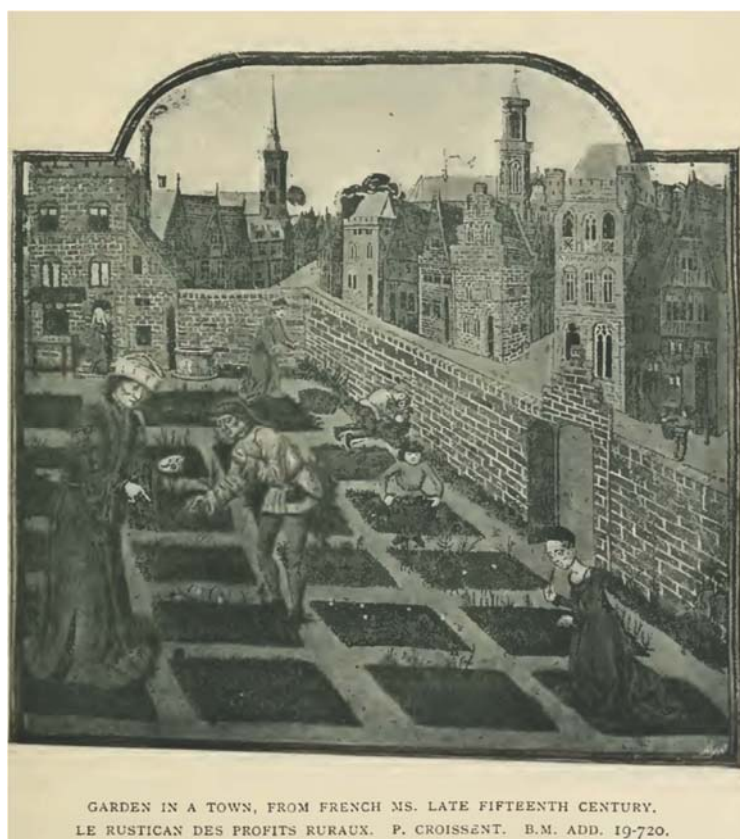
1250 年にヘンリー3世は女王のために、ウッドストックの庭園に改良を加えた。ウッドストックの管理人に実行することを命じたいくつかの仕事のうちには次のようなものがあった。「女王の庭園のぐるっと周りに2つの壁を作ること。その壁は十分に高くしてよその者が入ることができないようにすること、養魚池の近くには見た目にもふさわしく立派なハーブ園を造り、そこで女王が楽しめるようにすること、我が息子エドワードの礼拝堂に隣り合わせるハーブ園から前述の庭園につながる何らかの門を作ること」†。また1252年8月19日再び命令が出され、「大ハーバリウム」“great herbarium”を芝生で敷き詰めることが命ぜられた(‡同書 *Ibid.*, ヘンリー3世の第36年, m. 4.)。ハーバリウムという用語は、普通はハーブが育てられていた場所というぐらいの意味なのであろうが、この場合は、あずまや arbour のことを指す古い英語の“herber”、すなわち小屋 shelter とか隠れ場所“harbour”、という意味で使われているように見える。

†Liberate Roll, ヘンリー3世の第34年, m. 6 - ウッドストックにて, 6月20日, “cum herbario decenti et honesto prope vivarium nostrum, in quo ipsa Regina possit spaciari.”

同じ年、クラレンドン Clarendon[イングランド南部ウィルトシャー州、ソールズベリーSalisbury 近くの村]におけるその他いくつかの工事の中で、女王の隠れ場所“herbarium”が「作り直され手が加えられた」(§同書 *Ibid.*, ヘンリー3世の第36年, 7月9日, m. 6)。これは普通あずまやという言葉で理解される、囲われた場所のように見える。14世紀になるとこのようなあずまやに関する記述は多く見られ、そこは芝を張るのが習慣とされた。これに対し、ハーバリウムは多分小さな私的な庭園で、ハーブが植えられ高い生垣に囲まれていたのかもしれない。クラレンドンの庭園は柵により囲まれていたが(*Liberate Roll, ヘンリー3世の第37年, m.13)、ウィンザー(†同書 *Ibid.*, ヘンリー3世の第37年, m. 17.)とケニントン Kennington (‡同書 *Ibid.*)のものは溝で囲まれていた。1260年にはウィンザー城の外側でさらに手が加えられた。庭師の家が取り除かれ、壁が追加して建設された。後に続く数々の王朝時代においてもウィンザーのこの庭園は維持され、時々改良され、果樹園あるいはブドウ畑が広げられた。庭師とブドウ剪定人に対する賃金の支払記録は公文書館に保存されている多くの家計簿に残されている。庭師は年間100シリング、労働者は日当2½ペンスを受け取った。不思議なことは、これらの庭園で生産されたものが売られていたことであり、すべての果物が王室によって消費されていた時代にあって例外が認められていたようである。1332年には収入として次のような記載がなされている。「6シリング6ペンス、城外の王室庭園の果物および葉物野菜の売上」(§Ministers' Accounts. Bundle 753, No.9.)。その他同様の記載がなされて

いる。「ヘンリー5世〔在位1413～22年〕の王室執事でありワインズオー-Wyndsore 城主であったナイト爵位を持つワルター・ハンガーフォード Walter Hungerford の会計簿」(『同書 *Ibid.* Bundle 755, No.10.)(1419 - 22年)には、「国王のものであるその庭園の果物およびブドウに関して、この会計簿が書かれた2つの第2年(原文のまま)において生じるいかなる問題についても、彼は答えていないが、それはこの庭園から穫れた果物が国王陛下の王室に届けられ、そのブドウの実が当時王室にいた女性たちによって食されたので、城主自身はそこからいかなる利益も得ていないし、得ることもできなかった、と宣誓した上で述べている」。

ロンドン周辺には、ウェストミンスター、チャリング、ロンドン塔に加えて、ほかにも王室の庭園が存在した。市民が所有している小さな庭については、フィッツシュテファン FitzStephen が、同時代に生きたトマス・ベケット Thomas a Becket の生涯の中で描いた町の様子から垣間見ることができる。その一節(翻訳)は次のようなものである。「郊外に住む市民たちの家々の外側のすべての横に庭が隣接しており、そこにはゆったりとし見た目も楽しい木々が植えられている」



[図 2 - 1] 町なかの庭 フランスの写本 15世紀後半
Le rusucan des profits ruraux P. Croissant. B.M. ADD 19-720

ロンドン近郊で唯一のほかの大庭園で、宗教施設に付属した以外のものは、ホルボーンのヘンリー・ドゥ・レイシイ Henry de Lacy リンカーン伯爵の庭園であった。1295 - 6年の伯爵所有のすべての荘園の会計簿が残されている*。すべての領地で売られた生産物のリストがあり、そこには麻、コーン、豆 beans、マメ類 pulse などが記載されているが、どの生産物についても売れるだけの十分な量が穫れるのはホルボーンだけであった。“Grante sete Manor”荘園では7シリング4ペンスがブドウの木の剪定および栽培のために支払われているが、ほかの大きな荘園、たとえば Thoresby とか Pontefract では、庭園に関する記述は一切見られない。ホルボーンの会計簿はとても面白く、庭師や労働者に払われた賃金やブドウから作られたヴァージューズが何ガロンあったとか、売りさばかれた大量の梨やリンゴのことが書かれている。その他のものについては、多分庭園で育てられたものより種類が多いであろうが、購入されて伯爵に送られ、そしてリンゴや梨の接ぎ木の枝が庭園を補充するために購入された。

*この誠に見事な膨大な文書は、3フィート近くにも及ぶ長さの何枚かの用紙からなっており、その幅は約15インチ、公文書館に保管されている。ランカスター王族公領 Minister' Accounts. Bundle I, No. I.

リンカーン伯爵ヘンリー・ドゥ・レイシイの財産の会計簿、エドワード1世の第23年および第24年、ホルボーン；従士 serjeant [knight の下で軍務につき領主から封土を受けた] William de Donyncton はエドワード王の治世第25年の年、聖クレメント法王の日にホルボーンにて、同じ人 (Sir William de Nony) の前で同じ時の (エドワード1世の第23年聖ミカエル祭から24年聖ミカエル祭) 会計簿を提出した。9ポンドは庭園の梨、リンゴ、大ナッツ great nuts の売上、10分の1税 the tithe 控除後。2シリング3ペンスは庭園のサクランボの売上、10分の1税控除後。8シリング9 $\frac{1}{4}$ ペンスは庭園のハーブと“Jeritis”の売上、10分の1税控除後。6シリングは庭園の豆の売上、10分の1税控除後。20 $\frac{1}{2}$ ペンスはヴァージューズ“in fobis”で10分の1税控除後。12シリング3ペンスは49ガロンのヴァージューズの出荷、10分の1税控除後。3シリング2ペンスはバラの売上、10分の1税控除後。4シリング6ペンスは庭園の葉物野菜、10分の1税控除後。2シリング3ペンスは庭園の麻、10分の1税控除後。4シリング1 $\frac{1}{2}$ ペンスはタマネギ、ニンニクの売上、10分の1税控除後。2シリング6ペンスはブドウの苗木 (plancettis or plantettis?) の売上。(鹿の売上の受け取りもある)

支出 - 52シリング2ペンス、庭師の賃金と洋服代 (年間)。次に60シリング8ペンス、従士の賃金 (年間)。そして10シリング、従士の洋服代。次に43シリング8ペンス、Gaol of Flet の管理人に対し支払うべき年間耕作料。次に39シリング8 $\frac{1}{4}$ ペンス、これは庭園で働くいゝんな (人たち) への手当と、ブドウのほかハーブ、ネギ、その他中庭の費用やこやし dung を運んで撒くための費用が含まれている。そして5シリング7ペンス、豆2ブッシュと麻、タマネギ、ニンニクの種は植えるためのもの。次に22ペンスはヴァージューズを作るのを手伝う (人たち) への手当とそのために買う塩の費用。また3シリング2 $\frac{1}{2}$ ペンスは、「ルール梨 Rule の insitis (= 接ぎ木) 2本、マルタン梨 Martin のもの2本、カルエル梨 Caloel のもの5本、プセ・プセル梨 pesse pucele のもの3本」が植えるために買われた。次に2シリング6ペンスは庭園の杭柵の補修費用。また44シリング4 $\frac{1}{2}$ ペンス、馬小屋から庭園の中の大きめの

溝の北端に至る杭柵を支える最近作られた “kay” 1 つの費用として。8 シリング 0½ペンスは、カワマス (*Iuporum aquaticorum*) の餌として購入された小さな魚やカエル、ウナギの代金。27 シリングは、「カルエル梨」100 個、「プセ・プセル梨」100 個、「ルール梨」200 個、「マルタン梨」300 個、(そして) “quoynz” 300 個の購入と Ambr’ (Amesbury Wilts?) の伯爵への運搬費・・・17 シリング 0½ペンスは、タマネギ 1500 個 (と) 1½分のニンニクを購入してカムフォードへ送るための費用で、その運搬に 11 シリングを計上。

これらの帳簿に記入されている梨の多くはフランスから来たものようである。“caloel” は他の土地では “cailloel” と呼ばれたが、これは [フランス語の] “caillou”、いわば小石に当たるもので、それは形が似ているからで固いからではないと思いたい名前だ。“pesse” あるいは “passe pucelle” も明らかにフランス語である。サンルール梨 “S. Rule” pear はおそらくサンレゴロ St. Regolo、すなわちルール Rule にちなんで名付けられたのであろう。サンレゴロはアルルの司教でサンリス Senlis の第一司教であった。ロシェル Rochelle はフランスでは梨で名高いが、ある年ロンドンの長官がそこからいくつか輸入し、ヘンリー 3 世に献上した。これらの多様な品種の梨、およびこれに支払われた価格に関する詳しい情報は、公文書館に納められている極めて興味深いその他の記録により知ることができる。これらの書類とはヘンリー 3 世およびエドワード 1 世のために購入された、時期は異なる果物の請求書である。一番早い時期のものは多分 1223 年のものであろう。記録の初めの方は失われてしまっているが、名前不明な某国王の第 7 年という日付となっている。場所と日付からわかる内部資料により、その国王とはヘンリー 3 世と思われる。彼は当時まだ目立たず、その治世第 7 年の動きもはっきりしないが、他の可能性のある国王たちすべての第 7 年の動向というものはわかっており、この記録に現れた日付とは一致しない。最初に記入されているのは 4 月 20 日、ポア “Pois” という場所で、リンゴ 600 個を 12 シリング、100 個のサンルール梨を 10 シリング、500 個のナッツを 2 シリングでパリから買っている。ヘンリーはその時イングランドに向かって旅行中であり、そして行く先々の、アルネ “Arenes”、アベヴィーユ “Abeville”、ガール “Gart”、そしてボローン “Bolone” で毎日パリからの大量の果物の献上を受けた。4 月 27 日、彼はドーバーにおり、そこでも引き続きロンドンに着くまで毎日、リンゴ、梨、ナッツが献上された*。1292 - 3 年の同様な記録によると、その他の何種類かの梨の名前がでてきており、その一部を挙げると次のようなものとなる (†王室会計文書からの抜粋。Treasury of the Receipt Miscellanea, 49 / 24. 20-21 エドワード 1 世)。

* “Item le VI^{me} jour de May a la Tour de Londres pour ii c. de poumes ii s. esterlins et pour i c. de poires ii s. esterlins et pour iii c. de nois vi d. esterlins.” - *Exchequer Q. R. Miscellanea*, 481 / 40.

覚書：ニコラスのヨーマン Yeoman [自由農民]、果物商のジョンがオール (セイント?) 祝祭日の前の次の火曜日に、カンバス Cambus から馬に果物を乗せて来た。カンバスからはパーウィック城に向けて船が・・・まず 900 個のカルエル梨、100 個当たりの価格 4 シリング、同じ荷物 (で) 500 個のパ・ブ

セル梨、100個当たりの価格2シリング。籠 panēr (paniers?) と綱に8ペンス。馬の借賃とその費用、そして男1人の4日分の費用として3シリング6ペンス。また聖エドモンド祝祭日の前の次の水曜日に国王、バーウィックの町から(城)へ700個のレーグル梨、100個当たりの価格3シリング、-あわせて300個のコスタードリゴ、100個当たりの価格12ペンス。・・・運賃 $\frac{1}{2}$ ペンス

バーンウェルに滞在中の国王陛下へ送付、Palm Sunday [イースター直前の日曜日] の後の次の月曜日に800個の見事なレーグル梨、100個当たりの価格10ペンス、あわせて900個のリンゴ、100個当たりの価格3ペンス。また1200個の“Chastevns”、100個当たりの(価格)2シリング。籠(paniers?)と綱に6ペンス。馬1頭の借賃とその費用、そして馬丁1人往復の費用として2シリング1ペンス、合計13シリング11ペンス、以上。

国王陛下に送付、ステファン・ミュー Stephen Mewe により、キリスト顕現日の後の金曜日、1700個のレーグル梨、100個当たりの価格10シリング。加えて1400個の見事なマルタン梨、100個当たりの価格8シリング。さらに700個、100個当たりの価格3ペンス・・・

北部に滞在中の国王陛下へ送付、4500個の“dieyes”(あるいは dreyes?) 梨、100個当たりの価格3シリング、加えて1200個の“sorell”梨・・・

ヨークに滞在中の国王陛下へ送付・・・6000個の“ゴールド・ノップ”gold knopes”梨、100個当たりの価格2ペンス。あわせて5000個の“Chyrfoll”梨・・・

エドワード 1 世 [1272 ~ 1307 年在位] に対し、ニューカッスル、ヨーク、ポンテフラクト Pontefract、バーウィック Berwick、その他北部の各地において、果物が献上された。この日付は、ブルースとベリオールの時代のスコットランドとの戦争開始の日であり、それはエドワードがニューカッスルとバーウィックで議会を開催した時であった。興味深いことに思えるのは、このような大事件によって当時最も知られていた梨の名前が明らかにされるということである。この会計簿に記入されているところの、サンルール、すなわちレーグル梨 “Regul pears” のほとんどを今でも見ることができ、また初期の請求書からわかるように、この梨はまとめ買いされ、その値段は100個当たり通常3シリング、場合によってはたったの10ペンスであった。「レーグル」に次いで記入回数および量的にも多い梨は、カールウェル the “Calluewell” or “Calwell” およびパ・プセル the “pas pucell” or “pase pucell” であり、マルタン “Martins” というのもある。これら 4 種類すべての梨はリンカーン伯爵の帳簿にも見つけることができ、その値段は100個当たり4シリングから8シリングとなっている。このほかにも、“Dieyes”(または dreyes)、 “sorell”、“chyrfoll”、ゴールド・ノップ “gold knopes” の梨の記載があり、またリンゴ、マルメロ、これは “coynes” と呼ばれたが、栗 chestnuts、“chasteynes”* と “great nuts” も記載されている。

*パイプ文書 (printed, 1884 年、Vol. I.)、ヘンリー2世第5年、3シリング、ソールズベリーにいる女王に送られた栗 (castaneār) の代金として。

特に目を引く唯一のリンゴの品種としてはコスタード Costard [英国種の大きなリンゴ] があ

る。何世紀にもわたって最も人気のあるこの品種の名前は、“costermonger”という単語に由来しており、元々はこの果物の販売人の名前であった。オックスフォードでは1296年、コストードリンゴが100個1シリングで売られ、1325年にはコストードリンゴの木29本の価格は3シリングであった（†Thorold Rogers, *Hist. of Agricultural Prices.*）。このリンゴのことを初期の著作者たちは、ウォーデン梨と普通の梨を区別するのと同じように、特別の果物として描いた。グローステスト Robert Grosseteste [1175? ~ 1253年 イングランドの神学者・聖職者] は「リンゴとコストード」というようにコストードのことを書いた（‡Sloane MS. 686. “Tretyse off Housbandry that Mayster Groshede made.”）。もう一つの人気の高いリンゴの品種はペアメインである。初期の頃、これはリンゴ酒用に使用されていたことがわかっている。ジョン王の第6年、ノーフォークの東フレッグ村 the Hundred of East Flegg [100戸で1村のcountyの下級区分]、小規模の役務保有 serjeanty によりランハム Runham の領主であったロバート・ドゥ・エヴァメア何某 a certain Robert de Evermere は、聖ミカエル祝祭日に毎年、200個のペアメインと4ホッグズヘッド (modios) [古代ローマの単位] のペアメインから作られたワインを国庫に納めることによりその土地を与えられたものであった（§ Blomefield, *Hist. of Norfolk.* Vol. V., p.1378. Ed. 1775年）。エドワード2世 [在位1284~1327年] の第9年においてもその支払いは毎年行われていた。もう一つ別の梨の品種、ジャネッタール Janettar のことは、ヘンリー3世の治世第36年の衣裳掛の会計簿の一つに記載されており、それは「ロンドンの果物商ジョン」から “sorell”、“cailloel”と一緒に購入されていた（*Exchequer Q.R. Ancient Miscell. Wardrobe and Household Account, 1/22. R.O.）

[訳注 serjeanty : (中世英法) 君主に対する奉仕を条件として与えられる土地保有の一形態

hogshead : ワインの液量単位 (52.5 ガロン = 240 リットル) ビール (54 ガロン)]

これらの普通に見られた果物のほか、特別なものとしてチェリー、クワの実、セイヨウカリン、さらには桃などがあった。この最後の果物、桃が本当にイングランドにあったかどうか証拠を出せと言われるなら、ジョン王がニューアークで絶望と失望のどん底にあった時、桃の食べ過ぎとエールの飲み過ぎで死期を早めた事実からわかるというものである（† *Chronicle of Roger of Wendover.*）

以上引用してきた様々な会計簿は、どれもこれも同じようなもので退屈ではあるが、この時代の果物と庭園に関する情報源としてほとんど唯一の信頼できるものである。このように大量の果物を供給するには広大な果樹園があったに違いない。国王御用達の果樹商が何千ものリンゴおよび梨を王様のためにフランスから調達したと想像することは不可能である。もちろん少しは外国から来たであろうが、14世紀初期までにはこの国には多数の素晴らしい、古くからある庭園や果樹園が存在していたはずで、宗教的使命によるばかりでなく、多数の世俗的な土地所有者のもとで栽培されていたのである。庭園は、当時創設され始めていたオックスフォードやケンブリッジの様々なカレッジの周辺にも造られつつあった。ケ

ンブリッジのトリニティホールは見事な庭園を保有しており、そこにはブドウや「ハーブ園」“herbaria”が創設間もないうちに整えられ、ピーターハウスではそれより数年早く整えられていた。ロンドン周辺の庭園もその頃にはすでに造られていた。それらについては古い賃貸契約を調べることでさらにいくつか知ることができるかも知れない。次の事例はロンドン一地区内の庭園の数について一つのイメージを与えてくれる。それは1375年付けの庭園のための賃貸契約で（‡Letter Book. H. F. XIII. 49 Ed. III）、「庭園は市壁近くのロンドン塔地区に位置し、最近ジョン・セオ―John Seoh が取得したもので、北側にあるジェフリー・プッペ Geoffery Puppe が所有する庭園と、南側にあるウィリアム・ランボーン William Lambourne が所有する庭園の間にある」。果物と野菜 vegetables の栽培が大幅に増加したことの証明として、ロンドン市内および周辺の庭師とロンドン市長との間で起きた論争ほど明確なものはなく、それは庭園の生産物を売ることが許される場所に関するものであった。

1345年以前の長い間、伯爵、男爵、司教、ロンドン市民の庭師は、「豆類、サクランボ、野菜その他の品物を商売相手に」「セントポール寺院の教会敷地の門の近くにある聖オースチン教会の反対側の」地面で売ることを習慣としていたようだ。しかしながら1345年になるまでには、この青果市場は「歩行者、馬に乗って通る人々」の邪魔になるくらいに大きく成長し、混雑することになってしまった。「庭師とその使用人の下品で騒々しく迷惑な状況」が「名声のある人々が暮らすそのあたりの家に住む人々にとって」不愉快きわまりないものになり、また「聖オースチン教会で朝の祈りとミサを捧げる聖職者にとって、また神に祈り prayers and orisons を捧げるほかの人たち、書記や一般の人々にとっても迷惑」だったので、市長と長老議員 aldermen に対し善処し、市場をどこかもっとふさわしい場所に移転するよう請願が出された、この請願の結果、市長と長老議員が会合を持ち、命令が「当該庭師とその使用人に対して出され、彼らはこれ以降、前述の品物をその場所で売ることを禁じられ、それに違反すると罰せられることとされた」。しかし、庭師たちもそう簡単には引き下がらなかった。今度は彼らが市長に対し決定を覆して欲しいと請願を出した。その内容は、このようなものであった。「ロンドン市長殿へ 我々庭師たちは、伯爵、男爵、司教、ロンドン市民のために働いていますが、ここにお願ひするのは、閣下におかれては、ロンドン市の最大の守護者として、またロンドン市において古くから確立している慣習の最大の守護者として、我々庭師たちが平和裏に、昔からの慣習である同じ場所で、聖オースチン教会の前で、セントポール寺院の教会敷地の門の横に立って、ロンドンのその場所で、彼らの主人の庭園の生産物を売って、従来からやってきたように収入を得ることを認め、今までどおりとして頂くことをお願い申し上げます。これは、彼らが前述の場所で今まで邪魔されずにきており、そして彼らが主張するところによると、従来やってきたようには、一般市民の役に、そして自分の主人の役に立つことができなくなる、ということを考えてのことです。以上の件につき、再検討をお願いします」。しかし、市長は当初譲歩しようとはしなかったが、後

には「長老議員との会議」を持ったようで、そこで次のように合意された。「市内のすべての庭師たちは、自由市民 freemen などの特別な人々 aliens と同様に、豆類、サクランボ、野菜その他の前述の品物を市内で売る彼らの場所を持つことができることとし、その場所は、聖オースチン教会敷地の南門と、同じく市内のベイナード城にあるドミニコ会修道士 the Friars Preachers の庭園の壁との間の空間とし、これにより市長とこのために任命された長老議員により指定された場所で、彼らは前述の品物を売ることができることとし、その他の場所は認めないこととする」。(*Letter Book F, fol. cxi, of the Guildhall, and Riley's *Memorials of London Life.*)